

ショートメッセージ

2022年9月18日(日)「ダニエルの祈り」

暗唱聖句: 憐れみと赦しは主である神のもの。(ダニエル9:9)

皆さんは、今日の箇所からどのような印象を受けられたでしょうか。とにかく猛烈に、主に謝り続けるダニエルが印象に残るかもしれません。この力強い祈りが捧げられた背景に、まず目を向けたいと思います。

前回も触れられた通り、ダニエルがバビロン捕囚により南ユダ王国から連れてこられたのは16歳ごろ。そして優秀な政務官として長く仕え、バビロンからペルシャに治世が変わり、ダレイオス王が就任したころには85歳くらいであったと考えられています。バビロン、ペルシャの偶像崇拜、多神教という環境の中に会っても、若き日に培われた真の神のみを礼拝する信仰は揺らぎませんでした。

ダニエルはエレミヤの預言を通して「エルサレムの荒廃の時」が70年であることを悟りました。エレミヤ書29章10-11節にはこうあります。

「主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す。わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。」

16歳のダニエルが85歳になっているので、この70年と言う期間はほぼ終わっています。あと少し耐えればまたエルサレムに帰れる、と喜ぶことも出来ましたが、続く12-14節にはこのようにも書いてあります。

「そのとき、あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く。わたしを尋ね求めるならば見だし、心を尽くしてわたしを求めると、わたしに出会うであろう、と主は言われる。わたしは捕囚の民を帰らせる。わたしはあなたたちをあらゆる国々の間に、またあらゆる地域に追いやったが、そこから呼び集め、かつてそこから捕囚として追い出した元の場所へ連れ戻す、と主は言われる。」

70年を経た後に、心を尽くして神さまに祈るならば元の場所へ連れ戻される、というのが神さまからのお約束でした。ダニエルはこの予言を受けて、とことん主に向き合い、祈ろうとしたのかもしれませんが、70年も経てば捕囚当時や捕囚前の記憶は民全体から薄れ、世代も変わっています。そうした中でも真実の神への信仰を、民が失わずにいられるか、神さまからのチャレンジだったのかもしれませんが。

先日、ディズニーのSFアニメ「バズ・ライトイヤー」という映画を鑑賞しました。未開の惑星へと旅立った開拓団が、不慮の事故により予定外の星に不時着。当初は宇宙船を直して本来の旅路に戻ろうとしますが、時間が経つごとに人々はそれを諦め、主人公だけが解決に挑み続けます。物語が大きく動き出すのは不時着から60数年経ってからで、それこそ不時着後に生まれた世代が大半であり、この星で生活するのが当然という環境でした。ダニエル書を意識した作話かはさておき、これを観たばかりでしたので、60年以上経っても信仰を失わず、民全体のために祈れる凄味を感じました。

さて、祈りの内容は徹底した罪の告白です。ダニエル自身は正しい人でしたが、民全体がどのような過ちを犯したかを深く理解した、主語を「私たち」としてその過ちを言葉にしています。冒頭の4節には「主を愛しその戒めに従う者には契約を守って慈しみを施される神よ」とありますので、

神さまの慈しみは無条件ではなく、神と民との間の約束、契約に応じて施されるという信仰が読み取れます。具体的にどのような過ちがあったかは、これまでの主日礼拝でエレミヤ書シリーズとして語られてきた通りで、単に偶像崇拜などだけに収まるものではありません。真に神さまと向き合い、祈るという姿勢は、捕囚前の民が失っていたものの一つではないでしょうか。エレミヤ書における警告がそうであるように、当然私たちにも無関係な話ではありません。

バビロン捕囚という出来事自体はいわば侵略であり、イスラエルの民は被害者とも言える中で、こうした事態を引き起こした原因は自分たちの過ちにある、と捉えていることも学ぶべき点の一つです。私たちが困難を前にした時、これと同じように、ただ助けを求めるだけでなく、まず自分自身の罪に思いを馳せ悔い改めようとする思いが持てるか、問われているのではないのでしょうか。

一方でこのダニエルの祈りは、目いっぱい悔い改めた後に、目いっぱい「お願い」をしている点も大切だと感じます。16-19 節では「耳を傾けてください」「聞いてください」という言葉を繰り返して、エルサレムの復活を具体的に祈り求めています。

祈りの要素として、賛美・感謝・悔い改め・願い・執り成しなどが挙げられます。感謝や執り成しはどちらかと言えば具体的なことを挙げやすく、また誰かと祈りを合わせる際にも言葉にしやすと思います。一方で、自身の罪と向き合い、言葉にし、悔い改める祈りを具体的にすることは、人のいる場だと難しいかもしれません。また願う祈りも、内容によっては一人でないと言えないこともあるでしょう。では一人静かに祈る時ならば大丈夫かと言うと、罪を口にすることが情けなかったり、大した努力もなしに願いを口にすることが恥ずかしかったりと、余計な思いが邪魔をします。その結果、悔い改めも不十分で、真の願いは心に秘めたまま・・・といった、どこか不健康な信仰生活にもなりかねません。

神さまと正しい関係でいるために、罪の自覚、告白、悔い改めは不可欠なものであること。その上で、罪の大きさにひるむことなく、神さまはそれでも赦し愛してくださる方との希望を持って、願いは堂々と、具体的に主の前に差し出すこと。そして、こうした祈りは神さまと一対一で向き合っこそ紡がれるものですから、断食までしたダニエルのように、祈りだけに集中する時間や環境を備えること。これらの大切さを、本日の箇所より教わりました。

● 分かち合い

- ・ 一人で祈る時間や環境を作るために、心がけていることはありますか。
- ・ 自分は大丈夫だと安心せず、悔い改めの思いを持ち続けるために大切なことは何でしょうか。

(担当：K.G.)